

通級による指導において、特性に応じた学び方の指導を行うことによって自信がもてるようになった、学習障害と注意欠陥多動性障害のある中学2年生の事例

1. 事例の概要

通常の学級に在籍し、学習障害（LD）と注意欠陥多動性障害（ADHD）を併せ有するA生徒（中学2年生）に対し、通級による指導で、主に国語科の内容を取り扱いながら、特性に応じた学び方の指導を行うとともに、通常の学級における教科の指導においても合理的配慮を行ったことで、学習への適応が図られ、本人が学習に対し自信が持てるようになった事例である。

キーワード 注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）、通級による指導、国語

2. 生徒の実態

A生徒は、注意欠陥多動性障害（ADHD）と学習障害（LD）とを併せ有すると診断された、B中学校に通う2年生である。A生徒は、一斉指導では十分な学習効果を得にくいことから、通級による指導を週2時間受けている。学力は平均より下のレベルである。特に「言語理解」が苦手で、言葉の理解や操作に困難が見られる。漢字の読み書きに苦手意識があり、難しい漢字が出てくると板書を写すことや読むことを諦めてしまうことがある。しかし、聴覚的な短期記憶は優れており、古文の暗唱テストでは1回で合格できた。自己の得意な能力を学習に生かすことで自信も徐々に付いている。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B中学校の通級による指導では、生徒の実態や特性に応じて、各教科の内容を取り扱いながら、個別指導や少人数指導を行うとともに、ソーシャルスキルトレーニング（SST）など、社会性を身に付けるための指導を行っている。【基礎1】
- 合理的配慮協力員や特別支援教育巡回アドバイザーを招き、指導や助言を受けたり、通級による指導担当教員との情報交換を行ったりして、指導や支援体制の充実を図っている。【基礎2】
- 学級担任と通級による指導担当教員が家庭訪問をして、保護者と本人を交えて面談し、本人の願いを聞き、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成している。また、中学校では将来の進路を見据え、本人や保護者の希望を指導体制や学習に生かすよう工夫している。【基礎3】
- B中学校には、特別支援教育支援員が2名配置されており、主に学習支援を中心に指導や支援を行っている。また、B中学校の4名の教員が、特別支援学校免許法認定講習を受講し、特別支援学校教諭免許状を取得している。【基礎6】

4. 合意形成のプロセス

学級担任や教科担任による実態把握や合理的配慮協力員による授業参観を行った後、学級担任が、A 生徒に通級による指導についての説明を行い、A 生徒から同意を得た。また、夏休み期間中に三者面談を実施し、学習面での A 生徒の困難さと、学習環境を整えることで A 生徒の成長や自立を支援できる旨を保護者に伝えた。さらに、就学支援に関するガイダンスを行い、A 生徒が諸検査を受け、医療機関を受診した後に、保護者への聞き取り調査を行った。その後、特別支援教育コーディネーターが B 中学校のある C 市教育委員会の担当職員と連携をとり、A 生徒に対する支援を行うことを校内支援委員会で決定した。A 生徒には、保護者同席のもと、専門医の診断書と諸検査の判定結果を伝え、通級による指導を受けることへの同意書を提出してもらった。

5. 合理的配慮の実践

- 授業のはじめに学習の内容や流れを説明し、見通しを持たせて学習に取り組ませている。学習課題も問題数を少なくし、A 生徒が負担に感じないように、また、課題をクリアしたときの達成感を味わうことができるよう配慮している。【合理①-1-1】
- A 生徒の国語の学習において配慮や工夫している事は、以下の①から④である。
 - ① 見通しを持たせるため、本時の授業の流れを提示する。
 - ② 疑問や不安に思っていることはそのままにしない。疑問や不安なことを全体の場で取り上げて指導する。また、授業内でできない場合は別に時間を設け指導する。
 - ③ A 生徒が学習した内容を確認するための時間を設定する。
 - ④ A 生徒のノート（板書）や配布プリントへの工夫。
 - ア A 生徒が読みやすくするため明朝体を避ける、大事な部分は文字サイズを変える。
 - イ 授業の流れが分かるように工夫する。
 - ウ 図表等を多く用いたり、ICT 機器を活用した映像や写真を提示したりして、A 生徒が視覚的に分かりやすい工夫をする。
 - エ A 生徒の書く分量を減らすように工夫する。
 - オ 読むことに困難をきたさないように、漢字にルビを振る。【合理①-1-2】
- 学級担任は、合理的配慮協力員や特別支援教育巡回アドバイザーから、A 生徒への学習面や生活面での指導・支援の改善を行うための助言を受けている。【合理②-1】

6. 本事例の成果と課題

本事例は、A 生徒の特性を考慮して、通常の学級担任と通級による指導担当教員が連携し、授業における指導内容や方法の工夫、改善の取組が、A 生徒の苦手意識の克服と自信につながったものと考えられる。A 生徒は、以前よりも積極的に学習に取り組むようになった。

今後の課題としては、思春期の中学生がどのようなことに不安や困難さを感じているのかを把握し、個別の教育支援計画や個別の指導計画の見直しや改善を行い、保護者や関係する教職員、関係機関、地域人材との連携を強化していく必要がある。また、A 生徒の学習上の困難さを軽減させるため、タブレット端末等の ICT 機器の充実も課題である。